

---

## すべては放射能雲の予測ミスから始まった

(烏賀陽弘道、原発難民、東京、PHP研究所、2012、p.19-30) 齋藤意子ほか、  
EMERGENCY CARE 27: 256-260)

2017年12月15日、災害医学抄読会 <http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/>

---

### 福島第一原発から流れ出た放射性物質の行方

本論に入る前に、前提となる事実をまとめる。2011年3月、福島第一原発から流れ出た放射性物質は、煙や雲のような空気中を漂う粒子の集合体として空中を移動していった。それが移動しながら下に落ちたところに、放射能の汚染地帯ができた。その広さは、直径数センチメートルから数メートルの「ホットスポット」と呼ばれるものから、集落や町村が丸ごと汚染地帯になったケースまでである。

福島第一原発事故が起きた直後、「放射線は光のように四方に飛び、距離とともに減衰する」という説がテレビなどで報じられたが、これはひどい誤りであった。なぜなら、放射能が距離とともに減衰するのは、「放射線源が1つだけ」というケースに限られるからである。福島第一原発事故では、莫大な数の放射線源がチリに乗って煙のように流れた。

煙や噴煙が小さな粒子の集まりであるように、放射性物質も粒子の流れとして動く。こうした放射性物質をくっつけているチリを、専門家は「放射性ダスト」と呼ぶ。こうした放射性ダストが集まると、「放射能雲」あるいは「放射性雲」という塊になる。

### 犠牲者を増大させた政府の二重の過ち

福島第一原発事故において最大の被害をもたらした放射能雲は3月15日に流れ出たと考えられている。この放射能雲は畔に乗って北西方向に流れ、阿武隈山地を超えていった。そして福島市に到達すると直角に折れ曲がって南下し、栃木県や群馬県北部、千葉県柏市などに流れた。途中で2つに分岐し、一方は新潟県、一方は東京都心を通り過ぎて静岡県に流れた。こうした放射能雲の流れに対し、住民を守るという観点でいえば、政府が決めた「原発からXキロ」という人工的な線引きはまったく無益だった。20キロラインや30キロラインの外側でも放射能雲の真下に入りまともに被曝してしまった人たちがいるし、逆に20キロラインの内側で外側より線量が低いのに避難を強制された人もいる。つまり、政府の愚策は、「避難すべき人が避難できずに被曝した」「避難の必要のない人に避難を強制した」という二重の誤りを犯したことになる。

### 放射能雲の方角を予測し忘れたずさんな事故対策

政府が「3キロ」という円を初めて設定したのは、地震発生当日3月11日午後9時23分である。その後、政府は現在に至るまで、3キロを10キロ、20キロ、30キロと拡大す

るのみで、「円形のゾーンを設定して、その内外で危険の度合いを決める」という錯誤を続けたまま、まったく改めていない。これは、菅直人首相（当時）や閣僚だけが責めを負うことはできない。原子力の専門家で構成される原子力安全委員会、官僚である原子力安全・保安院もこうした事態が発生したときに政府に対してアドバイスをする立場にあったからである。ところがいざ本当に原発事故が起きると、初動を間違えたまま、誰も避難対策の誤りを修正しなかった。その結果、ある住民は「被曝」という形で犠牲になり、ある住民は「避難」という形で家や故郷、職場を追われたのである。そして、法律上は安全であるはずの20キロラインの外側に発生した高線量の汚染地帯の辻褄を合わせるために「計画的避難区域」とか「避難勧奨地点」などといった煩雑な名称が場当たりの乱発された。

福島第一原発からの距離で危険の程度を測るという誤った事故対策のために、「福島第一原発からの距離が近いほど危険」という誤解が日本中に広まった。その最大の被害者はもちろん福島県であり、風評被害、差別、いじめへと発展した。